

中国のウイグル族

狩野 修二

ウイグル族は中華人民共和国（以下中国）で認定されている五五ある少数民族のひとつであり、その多くが新疆ウイグル自治区に居住している。二〇一〇年の人口センサスによれば、ウイグル族の人口は中国全体で約一〇〇七万人おり、そのほとんどがイスラームを信仰している。近年日本のニュースなどでは民族問題の当事者としてとりあげられることが多いが、ここでは彼らウイグル族を知るための図書を紹介したい。

現在の新疆ウイグル自治区にあたる地域は、一八世紀半ばには清朝により征服されたが、塚田誠之編『民族の移動と文化の動態—中国周縁地域の歴史と現在』（風響者 二〇〇三年）によれば、ウイグル人の社会・文化に大きな変動が現れたのは中国成立後であるとしている。漢族の移住により、現地で話されているウイグル語やウイグル文化がどのような影響を受けたか、また中国建国後から現在までに新疆ウイグル自治区にどのような変化が起こったのかを知ることができる。政府の政策により新疆ウイグル自治区への漢族の移住が進められ、その人口は一九五〇年の三〇万五八〇〇人から一九九九年の六八七万一五〇〇人と四九年の間

に二・五倍にも膨れあがったことと数々の面からだけみてもかなりの影響があったことは想像に難くない。

ウイグル族を知るうえでイスラームと彼らを切り離して考えることはできない。このことについては中国ムスリム研究所編『中国のムスリムを知るための60章』（明石書店 二〇一二年）が参考になる。中国にはイスラームを信仰する少数民族がウイグル族のほか、回族、カザフ族、クルグス族等九つほどあり、彼らも含めた中国ムスリムの言葉、文化、生活、歴史等を紹介している。ちなみに二〇一〇年に実施された人口センサスによれば中国ムスリム少数民族人口は、合計で約二三〇〇万人とされており、そのうち、ウイグル族は約一〇〇七万人と、回族の約一〇五九万人に並ぶ一大勢力である。

ウイグル族の多くが新疆ウイグル自治区に居住していると冒頭で紹介したが、中国国内の漢族を初めとする人々と同様、ウイグル族も経済的理由等で中国国内の都市部へ移動している。李天國著『移動する新疆ウイグル人と中国社会—都市を結ぶダイナミズム』（ハーベスト社 二〇〇〇年）では、ウルムチ、北京、広

州で彼らがどのようににネットワーク、コミュニケーションを作り出しているかを、参与観察、インタビュ調査を土台とした研究結果を報告している。

作家の王力雄による『私の西域、君の東トルキスタン』（中国書店 二〇一一年）は、「新疆問題」を考えるうえで参考になる資料である。本書の内容は大きく三つに分けられる。ひとつは漢族である著者が新疆の民族問題について調査を行った結果、逮捕・投獄され、そこでウイグル族である政治犯ムフタルと知り合うまでの回想記。ふたつ目は、四回に渡る新疆ウイグル自治区での紀行。訪れる街や村の様子や、現地での観察や現地の人との会話によるウイグル族の置かれた状況が詳細に書かれている。最後に著者とムフタルによる中国におけるウイグル族の民族問題に関する対話の記録である。ムフタルという一人物との対話ではあるが、彼の発言を通じてウイグル族の歴史観や価値観等を知ることができる。

中華民国期の一九三三年と一九四四年の二度、現在の新疆ウイグル自治区の西南部と北部でウイグル人を中心としたテュルク系イスラム住民による独立国家の建設が行われたが、国際情勢の中、非常に短い期間で消滅することになる。王柯著『東トルキスタン共和国研究—中国のイ

スラムと民族問題』（東京大学出版会 一九九五年）では、東トルキスタン共和国の上層部に近い当事者へのインタビュ、公文書、手紙、文章、外交資料等の一次資料により、これら独立運動がどのように進展し、終わっていったのかを綴っている。

政治的な理由で海外に亡命しているウイグル人も数多くいる。そのうちの一人で、世界ウイグル会議議長であるラビア・カーデル著『ウイグルの母ラビア・カーデル自伝—中国に一番憎まれている女性』（ラナムハウス講談社 二〇〇九年）は、彼女の幼少期からアメリカへの亡命までを綴った伝記である。彼女は経済的に成功し、中国人民政治協商会議委員に選ばれるが、民族問題に関する発言のため六年間の投獄生活を送ることになる。自伝ではあるが、新疆ウイグル自治区におけるウイグル族の置かれてきた状況が彼女の目を通じて理解することができる。また彼女以外の著名なウイグル人亡命者については、水谷尚子著『中国を追われたウイグル人—亡命者が語る政治弾圧』（文藝春秋 二〇〇七年）に詳しく紹介されているのでこちらも参照されたい。

（かのう しゅうじ／アジア経済研究所 図書館）